



Title	West Saxon Gospels におけるラテン語翻訳法 : 部分表現と不等比較表現を中心に
Author(s)	小塚, 良孝
Citation	大阪大学言語文化学. 2002, 11, p. 109-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

West Saxon Gospels におけるラテン語翻訳法¹⁾

－部分表現と不等比較表現を中心に－*

小塚 良孝**

West Saxon Gospels (c. 1000: 以下 WSG) におけるラテン語翻訳法は、これまで、分詞構造(同格分詞、拡充形、絶対奪格)、不定詞、迂言的否定命令法(noli/nolite+原形)等、様々な構造に関して分析がなされ、その結果、福音書間(マタイ伝Ⅱマルコ伝、ルカ伝Ⅱヨハネ伝)には、少なからず翻訳手法に違いがあることが明らかにされた。また、先行研究の調査結果は、全体的な傾向として、共観福音書(特にマルコ伝とルカ伝)の訳が、ヨハネ伝の訳よりも原典の構造を反映させる傾向が強いことを示している。WSGの翻訳者は不明であり、未だその人数に関してさえ意見の一致を見ないが、こうした明確な翻訳手法の相違は、翻訳者が一人ではなかったことを強く示唆する。

本稿の目的は、上述のような違い－共観福音書の訳はヨハネ伝の訳よりもラテン語原典の影響を強く受けている－が、他のラテン語構造の翻訳にも見られることを示し、WSGの複数翻訳者説を支持することにある。以下で取り上げるのは、不等比較表現と部分表現の翻訳法である。

To date, a number of studies (Sato 1991, Liuzza(ed.) 2000 etc) have investigated the style and technique of the rendition of the *West Saxon Gospels* (c.1000). As a result, it has been revealed that the translation method differs from one Gospel to another in many respects, with the main distinction evident between (i) Matthew, (ii) Mark and Luke, and (iii) John. Furthermore, the data presented in the previous studies show that the renderings in the synoptic Gospels (especially those in Mark and Luke), are, as a whole, more strongly affected by the Latin original (or, in other words, more literal) than that in John. This clear stylistic divergence

¹⁾本稿は、日本中世英語英文学会第16回全国大会(2000年12月9日於関西大学)で口頭発表した内容の一部を発展させたものである。本稿執筆に際して、多数貴重なコメントを下された今井光規先生、木村健治先生、渡辺秀樹先生、尾崎久男先生に感謝申し上げます。

*Variations in Translations of the *West Saxon Gospels* –with special reference to the partitive construction and the comparison of inequality– (KOZUKA Yoshitaka)

**大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

between the four Gospels leads us to the hypothesis first advocated by Drake (1894), that this version is a result of a collaborative effort, though the opposite view, the unity of authorship, was favored by some scholars (Bright(ed.) 1904, Abel 1962, Olsan 1973).

The aim of the present paper is to provide further support for the theory of divided authorship by showing that the distinction mentioned above can be observed in the translation of two more kinds of Latin constructions, namely, the partitive construction and the comparison of inequality.

キーワード：古英語、ラテン語、翻訳

1 はじめに

1.1 本稿の目的

West Saxon Gospels (c.1000：以下 WSG) におけるラテン語翻訳法は、これまで、分詞構造（同格分詞、拡充形、絶対奪格）や不定詞構造等、様々な構造に関して分析がなされ、その結果、福音書間（マタイ伝Ⅱマルコ伝、ルカ伝Ⅱヨハネ伝）には、少なからず翻訳手法に違いがあることが明らかにされた²⁾。また、先行研究の調査結果は、全体的な傾向として、共観福音書（特にマルコ伝とルカ伝）の訳が、ヨハネ伝の訳よりも原典の構造を反映させる傾向が強いことを示している。WSG の翻訳者は不明であり、未だその人数に関してさえ意見の一致を見ないが³⁾、こうした明確な翻訳手法の相違は、翻訳者が一人ではなかったことを強く示唆する。

本稿の目的は、上述のような違い—共観福音書の訳はヨハネ伝の訳よりもラテン語原典の影響を強く受けている—が、他のラテン語構造の翻訳にも見られることを示し、WSG の複数翻訳者説を支持することにある。以下で取り上げるのは、不等比較表現と部分表現の翻訳法である⁴⁾。

²⁾ WSG におけるラテン語統語構造の翻訳手法を分析した研究には、Raith (1951：拡充形)、佐藤 (1991：同格分詞)、Liuzza (ed.2000：絶対奪格、同格分詞、不定詞構造等) などがある。

³⁾ WSG の Authorship については、単独説 (Bright(ed.) 1904, Abel 1962, Olsan 1973) と複数説 (Drake 1894, 佐藤 1991, Liuzza(ed.) 2000) に論が分かれる。

⁴⁾ これらの古英語語法に関しては、網羅的な研究が既にある（部分表現については、Heltveit 1977、不等比較表現については Small 1929）。これらの研究は、主眼が古英語の語法分析にあるため、ラテン語の当該表現の翻訳手法そのものについては、殆ど問題としていない。

1.2 資料

WSG は主なもので 6 つの写本に残っているが⁵⁾、原本自体は現代に伝わってはいない。本稿で WSG として参照、引用したのは、この内、作成年代が最も古いとされる Corpus MS. (ed. Skeat 1871-87) である。尚、初期の 4 写本 (A、B、C、Cp) に限り、Skeat (ed. 1871-87) の異読欄を参照して写本間の異同を確認したが、違いは殆ど見られなかった。従って、本稿で示す福音書間の差異は、原本でも見られたものだと考えられる。

WSG のラテン語原典は不明である。これまでの研究で、Weber (ed.1994) などの現代版 *Vulgate* とは若干異なっていたものであることが明らかとなっているが⁶⁾、ラテン語原典を再構築することは不可能なので、本稿では、Weber (ed.1994: 以下 *Vulgate*) を参照、引用した。

2 部分表現

2.1 古英語における部分表現

古英語では、部分の概念は、大抵、属格か of 構造 (of+与格) によって表される。Heltveit (1977) に拠れば、部分属格の用例は of 構造に比べ圧倒的に多く文献に現れる。また、of 構造の用例の殆どは、ラテン語翻訳において、原典の分析的表現の訳として用いられたものである。このような事実に基づけば、古英語では、まだ属格が部分の意味を表す主要な方法で、of 構造の使用は確立していなかったと言える。

2.2 各福音書の翻訳

本節でラテン語部分表現として扱うのは、「数量詞+複数属格」(e.g. (1))、と「数量詞+前置詞 (ex、de)+複数奪格」(e.g. (2))である (従って、(3) のような集合名詞の場合は用例に含まれていない)：

- (1) unus vestrum me traditurus est (Mt 26 : 21)
- (2) Quidam autem ex ipsis volebant adprehendere eum (Jn 7 : 44)
- (3) De turba autem multi crediderunt in eum (Jn 7 : 31)

本稿筆者の調査では、*Vulgate* には、上記定義を満たす部分表現は、属格表現 40 例、前置詞表現 118 例 (ex+奪格 81 例、de+奪格 37 例) 見られた。以下の表は、それらが WSG でどのように訳されているかを示したものである：

⁵⁾10 c 末から 11 c にかけて作成された 4 写本 (A : Cambridge, University Library li.2. 11、B : Oxford, Bodleian Library Bodley 441、C : London, British Library Cotton Otho C. i. vol. I、Cp : Cambridge, Corpus Christi College 140) と 12 c に作成された 2 写本 (H : Oxford, Bodleian Library Hatton 38、R : London, British Library Royal I. A. xiv) がある。これらの写本の詳細については、Liuzza (ed. 1994 : xvi-lxxiii) を参照されたい。

⁶⁾Harris (1901)、Liuzza (ed. 2000) など。

表 1 (a) WSG におけるラテン語属格部分表現の翻訳⁷⁾

	Matthew	Mark	Luke	John	Total
属格構造	11	1	13	4	29
of 構造			3		3
その他			6	2	8

表 1 (b) WSG におけるラテン語前置詞部分表現の翻訳⁸⁾ (%)

	Matthew	Mark	Luke	John	Total
属格構造	8(26.7)	2(8.3)	7(22.6)	22(66.7)	39
of 構造	16(53.3)	14(58.3)	18(58.1)	4(12.1)	52
その他	6(20.0)	8(33.3)	6(19.3)	7(21.2)	27

⁷⁾数量詞別の統計は以下の通り：

表 2 (a) WSG におけるラテン語属格部分表現の翻訳 (数量詞別分布)

	Matthew	Mark	Luke			John	
	属格	属格	of	属格	その他	属格	その他
unus	4				3	2	
duodecim					1		
quattuor milia	2						
quinque milia	2	1					
multus	2						2
nemo				1	1	2	
nihil				1			
nullus				1			
quidam			3	1	1		
unusquisque				1			
quis	1			8			

⁸⁾数量詞別の統計は以下の通り：

表 2 (b) WSG におけるラテン語前置詞部分表現の翻訳 (数量詞別分布)

	Matthew			Mark			Luke			John		
	of	属格	その他	of	属格	その他	of	属格	その他	of	属格	その他
unus	11	4	2	8	1	2	8	4	2	2	10	
duo	1	1		1		2	2			1	1	
quinque		1										
duodecim							1					
multus										1	4	1
nemo											3	
omnis							1					
alius	1											
quidam			4	5		4	4		2			6
aliquis											2	
quisquam								1			1	
quis	3	2			1		2	2	2		1	

表 1 (a) が示すように、*Vulgate* の部分属格表現は、ルカ伝に属格/of 構造以外の訳が多少目立つものの、四福音書のいずれにおいても、概ね属格によって訳されている。*Vulgate* の部分属格を of 構造で訳しているのは、ルカ伝の以下の 3 例のみである⁹⁾：

- (4) Ða cwædon sume of þan sundor-halgan [L. quidam autem Pharisaeorum dicebant illis] (Lk 6 : 2)
- (5) Ða cwædon sume of þam fariseum to him [L. Et quidam Pharisaeorum de turbis dixerunt ad illum] (Lk 19 : 39)
- (6) Ða genealæhton sume of saduceum [L. accesserunt autem quidam Sadducaeorum] (Lk 20 : 27)

他方、*Vulgate* が前置詞を用いている場合、表 1 (b) が示すように、各福音書の翻訳には差が見られる。最も特徴的なのは、大半(66.7%)を属格で翻訳しているヨハネ伝である。逆に、共観福音書では、半数以上(マタイ伝 53.3%、マルコ伝 58.3%、ルカ伝 58.1%)が of 構造で訳され、属格で訳される割合は大変低い(マタイ伝 26.7%、マルコ伝 8.3%、ルカ伝 22.6%)¹⁰⁾。

以上のことから、of/属格の選択に着目すると、共観福音書の訳は、ヨハネ伝の訳よりもラテン語原典の言語に影響されていると言える。

3 不等比較表現

3.1 古英語における不等比較表現

比較対象が名詞(または代名詞)の場合、古英語では主に 2 種類の不等比較表現が用いられる。一つは、接続詞 þonne (>PE than) による表現(e.g. (7))、もう一つは、与格による表現(e.g. (8))である。この内、与格構造は、比較される 2 つの対象が同じ動詞の同じ形態に対し、主格か対格の関係にある場合のみ使用可能である (Small 1929 : 18) :

⁹⁾この点は Heltveit (1977 : 78) で既に指摘されている。

¹⁰⁾*Lindisfarne Gospels* (10 c 半ば : 以下 *Li*) と *Rushworth Gospels 2* (10 c 後半 : 以下 *Ru2*) では、of と共に from もしばしばラテン語部分表現の注解に用いられる。*Li* では、部分の ex、de の注解として、of が 80 例 (double gloss 3 例含む)、from が 38 例 (double gloss 2 例含む) 現れる。*Ru2* では、部分の ex、de の注解として、of が 70 例、from が 10 例、部分属格の注解として of が 1 例 (Jn 21 : 12) 現れる。*Rushworth Gospels 1* (10 c 後半 : 以下 *Ru1*) には、from は一度も現れない。そもそも *Ru1* では、前置詞が用いられる割合自体が、前出の 2 つの行間注と比べて、圧倒的に低い。*Ru1* は、部分の ex、de の用例 31 箇所中、僅か 9 箇所に of を用いるのみである。このことから、*Ru1* の注解者 (Farman と推定される) は部分表現に前置詞を用いることに強い抵抗を感じていたことが窺える。

- (7) þes ys mærra þonne þ̅ templ (Mt 12 : 6)
 (8) ge synt beteran manegum spearwum (Lk 12 : 7)

Small (1929 : 80) によれば、古英語散文文献では、þonne 構造の方が既に圧倒的に優勢で、与格構造は 11c 初めまでには使われなくなっていた¹¹⁾。

3.2 各福音書の翻訳

ラテン語では、比較対象が (代) 名詞の場合、quam 構造 (e.g. (9)) か、奪格構造 (e.g. (10)) のどちらかが用いられる (ラテン語の奪格構造も、古英語の与格構造と同様の使用条件を持つ) :

- (9) nonne anima plus est quam esca (Mt 6 : 25)
 (10) non est servus maior domino suo (Jn 13 : 16)

以下の表は、*Vulgate* に見られるこの 2 種の不等比較表現が、WSG でどのように翻訳されているかを示したものである :

表 3 (a) WSG におけるラテン語 quam 構造の翻訳

	Matthew	Mark	Luke	John
比較級 + þonne	11		5	4
比較級 + 与格				
最上級			1	
その他		1		

表 3 (b) WSG におけるラテン語奪格比較の翻訳¹²⁾

	Matthew	Mark	Luke	John
比較級 + þonne	7		5	15
比較級 + 与格	3	1	3	
比較級 + 属格			2	
比較級 (比較対象省略)		1	2	
最上級	1	2		
その他 (比較級以外)				2

¹¹⁾“But the evidence *does* enable us to assert that at the time of the earliest connected prose records the dative of comparison held about one-fifth of the field of expression that lay within its function, that the particle encroached more and more upon this fifth, and that by the beginning of the eleventh century the case had passed out of use.” (Small 1929 : 80)

¹²⁾ヨハネ伝に一例だけ、属格により比較対象が表現されている用例が見られた。これも奪格比較の用例に含めた :

(11) et maiora horum faciet (Jn 14 : 12)

上表が示すように、ヨハネ伝と共観福音書では、翻訳の手法に明らかな違いが見られる。ヨハネ伝では、*Vulgate* の表現に関わらず、比較表現としては、*bonne* 構造しか翻訳に用いられないが、共観福音書では、*Vulgate* の表現によって翻訳の傾向が異なる。つまり、*Vulgate* が *quam* 構造を用いる箇所には、*bonne* 構造がほぼ一貫して用いられるが、*Vulgate* が奪格構造を用いる箇所には、以下の例のように、与格構造など *bonne* 構造以外の比較表現が度々用いられる：

L. 奪格構造 → OE 与格構造

- (12) Witodlice micle ma mann ys sceape betera [L. quanto magis melior est homo ove] (Mt 12 : 12)

L. 奪格構造 → OE 属格構造¹³⁾

- (13) þæs þe ma ge synt hyra selran [L. quanto magis vos pluris estis illis] (Lk 12 : 24)

L. 奪格構造 → OE 最上級

- (14) hit is ealra wyrta mæst [L. maius est omnibus holeribus] (Mt 13 : 32)

この内、(14) のような最上級による翻訳は、ラテン語で比較対象が *omnis* (または *omne*) を含む箇所に限られている。この種の奪格比較は、*Vulgate* の共観福音書に 4 例、ヨハネ伝に 1 例現れるが、両者の翻訳は明らかに異なっている。共観福音書では、4 例中 3 例が最上級、残りの 1 例 (用例 15) が奪格比較で訳されている¹⁴⁾：

- (15) þæt is mare eallum onsægdnyssum 7 offrungum [L. maius est omnibus holocaustomatibus et sacrificiis] (Mk 12 : 33)

それに対し、ヨハネ伝では、*bonne* 構造が用いられ、*omne* が *ænig oðer ðing* と言い換えられている：

- (16) þ þe min fæder me sealde is mærræ þonne ænig oðer ðing [L. Pater meus quod dedit mihi maius omnibus est] (Jn 10 : 29)

¹³⁾ 属格による比較対象の表現に関して Small (1929 : 88) は、‘the *genitive* came into use with comparatives whenever the comparatives left the function of an adjective and assumed that of a noun.’と述べている。Mitchell (1985 : § 1337) も同様の見解を示している。

¹⁴⁾ *quam* 構造の用例にも、ルカ伝に 1 例 (Luke 21 : 3) だけ比較対象が *omnis* を含むものがあるが、それも最上級で訳されている。

最上級の使用とともに、共観福音書におけるラテン語奪格比較の翻訳で注目されるのは、与格構造の使用である。というのは、先に述べたように(3.1節)、WSGが成立したと推定される10c末にはその使用は稀であったからである。それにもかかわらず、ラテン語が奪格比較の場合に限り、比較的高い割合(マタイ伝27.3%、マルコ伝25.0%、ルカ伝25.0%)で与格構造が用いられていることは、共観福音書の訳者がラテン語原典の影響を受け易かったことを強く示唆している¹⁵⁾。

以上見てきたように、ヨハネ伝と共観福音書では、*Vulgate*の奪格比較の翻訳法が大きく異なっている。bonne構造と与格構造の選択という観点から見れば、共観福音書は、ヨハネ伝よりもラテン語原典の影響を強く受けていると言える。

4 結語

以上、ラテン語の部分表現と不等比較表現の翻訳に関して、共観福音書では、ヨハネ伝よりも原典の構造に影響された訳がなされていることを示した。当時の言語状況を考慮に入れると、両者の翻訳は興味深い対照を示した。直訳的な共観福音書では、使用が当時一般的ではなかった表現(まだ確立していなかったof構造による部分表現と、殆ど廃れていた与格比較)が多用され、原典の影響が少ないヨハネ伝では、当時一般的であった表現(部分属格とbonne構造)が専ら用いられていた。

ヨハネ伝には、上述のような翻訳手法に関してだけでなく、ラテン語の影響を受けない部分(類義語の選択や語順など)についても、共観福音書とは異なる言語的特徴が散見される¹⁶⁾。このような広範囲にわたる言語的相違は、少なくとも、ヨハネ伝が共観福音書の訳者とは異なる人物によるものであったことを示すと思われる。

References

Texts

Skeat, W.W. (ed.1871-87) *The Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS.* 4 vols. Cambridge: Cambridge UP.

Weber, R. (ed.1994) *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* (Vierte, verbesserte

¹⁵⁾Small (1929: 71-2) は、この不可解な与格比較の使用から、WSGの成立年代を10c半ばと推測している。

¹⁶⁾類義語の選択については、Liuzza (ed.2000: 107-13)、Kozuka (2000)、語順については、Kozuka (近刊)を参照されたい。尚、その他、ヨハネ伝の言語の特異性は、Frarty (1929)、Ogura (1995)、Sato (1993)でも指摘されている(Frarty論文とOgura論文は助動詞の使用に関して、Sato論文は接続詞的副詞の使用などに関して)。

Auflage). Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft.

Books and Articles

- Abel, A.H. (1962) *Ælfric and the West-Saxon Gospels*. Diss. U of Pennsylvania.
- Bright, J.W. (ed.1904, rpt.1972) *The Gospel of Saint John in West-Saxon*. New York : AMS.
- Drake, A. (1894) *The Authorship of the West Saxon Gospels*. Diss. Columbia College.
- Frary, L.G. (1929) *Studies in the Syntax of the Old English Passive with Special Reference to the Use of Wesan and Weorðan*. Language Dissertations V. Baltimore : Waverly.
- Harris, L.M. (1901) *Studies in the Anglo-Saxon Version of the Gospels. Part 1 : The Form of the Latin Original, and Mistaken Renderings*. Baltimore : John Murphy Company.
- Heltveit, T. (1977) "Aspects of the Syntax of Quantifiers in Old English." *Norwegian Journal of Linguistics* 31, 47-94.
- Kozuka, Y. (2000) "On the Use of Some Synonymous Expressions in the *West-Saxon Gospels* in Relation to their Authorship." 『大阪大学言語文化学』 9 号, 107-26.
- _____. (近刊) "Syntactic Uniqueness of the Gospel of John in the *West Saxon Gospels* and their Authorship : Additional Evidence for the Divided Theory." *Studies in Medieval English Language and Literature* 17.
- Liuzza, R.M. (ed.1994) *The Old English Version of the Gospels*. Vol.1. EETS. O.S.304.
- _____. (ed.2000) *The Old English Version of the Gospels*. Vol.2. EETS. O.S.314.
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford : Clarendon.
- Ogura, M. (1995) "The Interchangeability of Old English Verbal Prefixes." *Anglo-Saxon England* 24, 67-93.
- Olsan, L.T. (1973) *The Style of the West Saxon Gospels*. Diss. Tulane U.
- Raith, J. (1951) *Untersuchungen zum Englischen Aspekt*. I. Teil (Grundsätzliches Altenglisch). München : Max Hueber.
- 佐藤明子 (1991) 「The West Saxon Gospels 再考」『青山学院大学文学部紀要』 33 号, 151-67.

- Sato, A. (1993) “The Unique Diction in the West Saxon Gospel According to Saint John.” 『英文学研究』 第 69 巻第 2 号, 339-51.
- Small, G.W. (1929) *The Germanic Case of Comparison with a Special Study of English*. Language Monographs IV. Philadelphia : Linguistic Society of America.